



校長会



No.38

三重県小中学校長会 広報 第38号

●発行●三重県小中学校長会 津市桜橋2-142 三重県教育文化会館内 TEL 059-227-7011 E-mail mie-kotykai@galaxy.ocn.ne.jp
●編集●三重県小中学校長会 広報委員会 ●印刷●光出版印刷株式会社 松阪市久保町1885-1 TEL 0598-29-1234

家庭や地域と共に力を合わせた学校づくり
本校区は、人的環境・（コンピナー
トに囲まれています）自然環境にも

また、それを具現化するため、新しい校歌の「自分をみがいてきらきらと」「自分を信じてぐんぐん」という一節を「めざす学校の姿」とし、子どもたちの輝く姿・笑顔を願ったのです。

両校の卒業生はもとより、保護者や地域の方々の思いを大切にしながら、同時に、子どもたちにも理解しやすい学校教育目標とを考え、教職員と協議を重ねました。

培ってきた歴史や伝統、成果を受け継いで
今年は、塩浜・三浜小学校が統合され、新生塩浜小学校としての初年度であり、塩浜地区に小学校ができて百四十周年の年でもあります。一九五四年（昭和二十九年）当時の塩浜小学校は、ベビーブーム、工場の復興等で四十学級、児童数二〇七八名のマンモス校でした。しかし、近年、両校とも児童数が減少したため統合となり一八七名でのスタートとなりました。

心の教育と確かな学力が育つ授業の推進
業間等子どもたちは、元氣よく運動場で遊んでいます。音楽が流れば静かに教室に入り授業が始まります。この子どもたちの笑顔がますます輝くよう力を注いでいきたいと教職員で話し合っている毎日です。

恵まれています。そういった環境を、教育活動の中に組み入れていきたいと考えました。そこで、学校づくり協力者会議・保護者・地域の関係団体の方々の協力を得、まず、通学区域が広がったことによる登下校指導などの協力を依頼しました。また、両校の子どもたちが、自分たちの住んでいる地域を見つめ、地域に誇りを持つてほしい、良さを見つめ直してほしいと願い、史跡等の地域学習・伝統文化の学習を計画しました。

私の学校づくり



ぐんぐんのびよう
きらきらかがやこう

塩浜つこ

四日市市立塩浜小学校

校長 堀 廉子



今日的課題の克服に向けて

美里地域施設一体型小 中一貫校開校に向けて

津市立辰水小学校

校長 荻原くるみ



津市教育委員会は、津市の教育を活性化し、子どもたちの豊かな学びをこれまで以上に保障していくために津市全体での小中一貫教育の推進を打ち出し、続いて、美里地域に施設一体型小中一貫校を開校することを発表した。

ここ美里地域では、少子化の影響を受け、児童数が年々減少しており、本校も十年前に比べ約半分の児童数八十一名となった。町内の他の二小学校も同様で、三小学校の児童を合わせてようやくクラスの適正規模の人数という状況である。

本校の子どもたちは、豊かな自然と、温かな地域の方々に見守られ大切にされて育ってきている。そして、人と人とのつながりを大事にしなが、地域の方々と一体となった行事を行ったり活動を行ったりしている。そんな中、大きい子が小さい子の面倒を見たり教えあったりする姿が自然に身についてきている。その反面、大勢の中でもまれ、切磋琢磨しながら考えたり工夫したりする姿がなかなか見られない現状もあり、その解決策の一つとして長年、小学校三年の学年交流を行ってきた。

施設一体型小中一貫校開校の準備の一つとしてカリキュラム作りに着手している。これまでも中学校と連携を図り、美里地域の三小学校が同一歩調で取り組んできた人権教育を基盤に、九年間の人権教育と地域学習をミックスした「美里創造学習」のカリキュラム作成を行っている。さらに美里地域では全学年での外国語活動

を実施している。どの校区でも行っていることではあるが、そのカリキュラム作りとともに、校区全体で教育課程の特例の申請という形にして、現在その許可がおりるのを待っている。これは、現在の教育課程外の内容をそのまま教育課程内に位置付け申請しているため、教職員に大きな負担にならないよう配慮している。現在、新しい校舎の教室の配置や小学生がいかに中学生と共同して備品や教室、運動場を使用するかについて様々な検討をしている真つ最中である。

大きな課題の一つは、通学対策で、山間地であるためバス通学以外に徒歩児童や自転車通学生徒の安全確保も重要で、関係各部署との調整を図り教育委員会担当課と検討を重ねている。

そして、学校運営上の重要課題は、学力向上である。県全体でも様々な方針や方策が出されているが、ここ美里地域でも、小中が一体となって、教科学習の基礎基本の定着と活用力の向上に向けた取組の方策を模索している。

また、中学校区に図書館司書が配置され、図書館運営を進め、読書活動を推進している。数年前に比べ、学校図書館の貸出冊数につ

いては飛躍的に伸びているものの、子どもの年齢が上がるにつれ、テレビを見たりゲームに費やす時間が増えたりして読書時間が減少しているのも解決したい課題の一つである。

本校では学校だより等での呼びかけだけでなく、児童会が中心となって、一週間に一日ノーメディアデーの取組を進めている。子どもたちの中からプラス・マイナス様々な声が聞かれるが、大人に強制されるルールよりも自分たちで考えて進んでいくことの意味や成果が大きいことを実感している。

今後も子どもたちが最大限の力を発揮できるよう、中学校区での様々な教育活動を推進していきたい。

柔軟に調整できる力を

名張市立名張小学校

校長 坂口 嘉博



常日頃感じていることであるが本校の児童の表情には屈託がない。よく思い起こしてみると、こ

れまで勤務した学校の子どもたちもまた屈託のない表情で、私と接してくれていたように思う。

そんな中、毎日の教育活動を進めているが、大きな変化が起こっていることを感じずにはられない。そして、本稿のタイトルが意味するところの「今日的課題」に重なるところも多い。

では、何がどうなってしまうっているのだろうか。答えは、いろいろ考えられる。その一つに、子どもの周りにいる大人（我々自身も含めて）や、或いは大人の生活状況が、子どもたちの生活感情や考え方で変えつつあるのではない。実際、日々の生活の中で、我々大人が変わってしまったなどか変わらずにはいられないこと等、たくさんある。

その色々な変化の中で、今後の教育の場で考慮しなければならないうこととして、私は次の二つをあげたい。

その一つは個人生活の追求、二つはその裏表の関係にあるコミュニケーションの喪失である。個人生活の基礎単位となっていた「核家族」ですら、崩壊という言葉まで目にする今日である。今、学校はこれらのことに起因する様々な事象・事態に真正面から立ち向かってい

る。まさに、悪戦苦闘しているのが、現在の教員である。

それでは、私たち現場を預かる者として、こういった課題をどのように克服していけばよいのか。

人間一人ひとりには、それぞれ生き方やそれを貫く考え方があ

る。それは、あつて当然のことである。それが、個人としての尊厳でもある。しかし、人間は悲しいかな一人では生きていけないのだ。他者の考え方との擦り合わせの必要が必ず起こる。ここに、矛盾があり、教育における今日的な課題と重なる。

個人生活の追求は、うまくいつている時はよいが、そうでない時孤立化・深刻化することが多い。それを解決していくには、結局調整力を発揮する相談役が必要なのである。

学級崩壊ということが、叫ばれて久しい。そして、それはどの地域の学校でも起こりうる現象であることは、教育関係者の誰もが認識していることである。そこで学級担任の指導力が問題になるわけであるが、しばしば年配の経験の多い教師の場合であつたりする。なぜ、経験知をもつ教師がうまく児童を指導できないのか。

私は先に述べた「大人・世間の

考え方の変化」に対応できない教師であるからではないのか、と考

える。トラブルの解決の中で、過去の経験知が邪魔をしてしまう。結果として、無意識に過去の解決策を相手に押しつけ、失敗してはいないか。

そういう意味では、今や学校において必ずしもベテランが成果をあげる状況にない。若い人と共に現状に学び、新しい経験知を構築する以外にないと考ええる。

そういう私自身も、そのスキルを十分持ち合わせてはいない。暗中模索をしている。ふだん心がけていることは、子どもからも親からも、思いをしつかり聞くこと、そして相談者の言葉の背後にあるもの（願い）を掴むようにしていることである。そんな中でやっと相手は心を開いてくれる。学校もまた相談役としてのコミュニティの窓口になっているのである。



校区小学校との連携 のあり方をさぐる

鳥羽市立鳥羽東中学校

校長 小 竹 篤



一 広くなった校区

本校は、開校三十六年目を迎える。旧鳥羽中学校、桃取中学校、菅島中学校、加茂中学校の一部を統合して開校された。さらに今年度は、鏡浦中学校も統合し、本市の全人口の六十五%をカバーする広い校区となった。

全校生徒数三〇九名。そのうち三十八名は離島からの通学生である。鏡浦地区からは二十五名の生徒がスクールバス通学をしている。校区に五つの小学校があるが、それぞれの地域特有の産業構造や住環境、住民気質を有している。

二 卒・入学生の情報交換としての交流

一学期には、五小学校の先生に来ていただき、中学校の授業を参観後、情報交換をしている。中学校全体の雰囲気と入学して二ヶ月ほど経った新入生の様子を中心に

交流している。

二学期には、中学校の教員が五小学校へ出かけてそれぞれの様子を見せてもらっている。特別な支援を必要とする児童の様子など、個別の情報交換をさせていただく事が多い。

三学期には、新入生の学級編成事務を控えた情報交換となる。

三 人権教育を柱とした校区交流

人権・同和教育を柱とした校区交流が行われてきた。主として小学校段階での人権・同和教育の力リキュラムを交流・共有する取組であった。その延長上に、小中間で人権の授業をお互いに交流してきた。

また、一昨年度から、校区の「子ども支援ネットワーク事業」が構築された。定期的な会合がもたれるようになったが、そのねらいや目的が職員に共有・共感されているというところまでには至っていない。

四 陸上競技練習を通じた交流

限られた学校だけとなっているが、本校の陸上部の練習に小学生が参加する形で年間二回ほどの交流を行っている。小学生にも、中学校の部活動を模擬体験できる機会として喜ばれている。

五 英語科を軸とした授業交流の試み

小学校に「外国語活動」が入るようになって、中学校の英語教師が小学校で出前授業を行うという交流を行ってきた。また、地元の高校からも「英語科」の中高交流について打診をされているところである。

近い将来、小学校の「教科・英語」の設置も話題になる中で、小・中・高の英語教員交流は今後の校区交流の柱になり得ると期待している。

六 校長が軸となる校区交流の方向性

前述のように、交通手段等の関係で「ちよつと寄つて」という訳にはいかないのが本校区である。校区交流を今後どのように進めるかという話し合いを校長会で持つことにしている。中心課題は「学力の向上」である。

全国学力・学習状況調査の結果から、校区全体の課題を改めて見直し、具体的な方策を立てようとしている。

例えば家庭の時間の過ごし方で、保護者に発信すべきことは何か。授業規律についてどこまでおさえるべきかなどであるが、今こそ校長の出るべき場面ではないかとの意見で一致している。

喫緊の課題である「学力向上に向けての校区交流」が動き出したと言っている。

全連小埼玉大会報告

全連小埼玉大会報告(全体会) 誇り高き子どもの育成

いなべ市立笠間小学校
校長 瀬 木 正 紀



一 はじめに

三重大会に続いて二年目となる大会主題「新たな知を拓き人間性豊かな社会を築く日本人の育成を」目指す小学校教育の推進が正面に高く掲げられた大宮ソニックシティ大ホールで、埼玉大会が始まった。私は昨年に続いての全連小大会参加という機会をいただき、満員電車で揺られて埼玉の地に着いた。

二 文部科学省講話

開会式に引き続き、文部科学省講話があった。数ある教育課題の中から話されたことは、次の八点である。①教育再生実行会議の検討課題②道徳にかかる教育課程の改善③英語教育改革実施計画④新たな教職員定数改善計画⑤いじめ問題への取組⑥不登校児童生徒を支

援する施策⑦土曜授業⑧特別支援教育の現状

これらの課題は、今後文科省の教育政策として新たな方向性が出されることが考えられ、注目していきたい。

三 シンポジウム

二日目のシンポジウムでは「未来をつくる誇り高き子どもたち」をテーマに、堀尾正明氏（キヤスター）・山田香織氏（盆栽家）、林家たい平氏（落語家）の三人の楽しいお話を聞かせていただいた。その中で、学校の先生と、い出会い・さみしさを感じた出合いがあり、三人とも子ども心に大きな影響を受けたということを感じておかなければならないと感じた。

四 忠恕の心

埼玉大会は『忠恕の心』をもって開催され、様々な工夫や配慮があり研究協議のための並々ならぬ努力がなされていたことを強く感じた。一例として全体会の座席が一日目は分科会ごとに振り分けられ、二日目は県単位で着席するよ



うに配置されていた。大会終了後、スタッフの皆さんが一人ひとりに挨拶してくださる姿を見ながら、昨年度の三重大会でも、県内の校長が力を合わせて大会を運営し、また役員さん方が大変なご苦労をされて成功裡に終えることができたのだということを、埼玉の地で改めて実感し帰路に着いた。

全連小埼玉大会 第8B分科会に参加して

多気町立相可小学校

校長 中 西 清



十月二十三日から二十四日にか

けて開催された全連小埼玉大会の第8B分科会（研究課題「これからの学校を担うリーダーの育成」の概要について報告したい。

一 分科会の運営方法について

分科会のテーマや趣旨を参加者に周知するため「要録」及び「手引き」が事前に送付された。

また、各参加者に二種類の付箋紙が配付され、研究発表の内容から①参考にしたこと、②課題と思うこと等をメモし、それを集約しながらグループ協議を行うなど、ワークシopp方式を採用して、協議の焦点化と内容の深化を図るための工夫がされていた。

二 研究発表と協議概要について

千葉県鴨川市立江美小学校校長は、小規模校におけるミドルリーダーの育成と教職員の資質向上の在り方について発表した。

「校務分掌の見直し」「校内研修体制づくり」「中学校区内の学校間連携」等を中心に協議が進められた。

また、埼玉県富士見市立南畑小学校校長は、ライフステージに視点を当てた管理職人材の育成について発表した。

「市教育委員会と校長会の連携による人材育成システムの構築」「校長による学校経営としての人材育成」等を中心に協議が進めら

れた。

三 分科会に参加して学んだこと

学校経営においては、児童生徒の教育指導をよりよく進めるための体制づくりや環境整備に主眼がおかれることが多い。

しかしながら、教育現場の人材育成は喫緊の課題である。

校長の仕事は「人材育成に始まり、人材育成に終わる」との言もある。

校長の学校経営力が「教職員の力を引き出し、組織をまとめる力」であるとするならば、校長自らが資質の向上に努め、意図的・計画的に、将来を見据えた学校経営を進めること自体が「人材育成」につながるものと考えらる。



全日中北海道大会報告

全日中北海道（苫小牧）報告
『いんかふて』

松阪市立三雲中学校

校長 川口 朋史



見事に台風十八号と台風十九号の合間をぬって、北の大地北海道で「いらんからぶて」（アイヌ語でこんにはは「あなたの心にそつと触れさせてください」）の挨拶で第六十五回の全日中大会の幕が開いた。

二日間、札幌市のホテルから片道七十kmを超える距離を高速バスで苫小牧市の会場まで一時間余りかけて移動した。さすがに北海道、その広さを改めて実感することになった。

そのようなことはさておき、今回の全日中校長会北海道大会は、三重県の中学校校長会にとつてある意味、特筆すべき大会のひとつになったのではないかと思う。大会の冊子を開くと、開会式直後の全

体協議会の第二研究協議題（地区提案）で津市立久居西中学校西村哲二校長、第四分科会での東海北陸地区代表として、鈴鹿市立創徳中学校 廣田隆延校長と三重

県の中学校のふたつの報告が掲載されていた。特に、全体協議会の地区提案は垂れ幕で全体会場に掲げられており、ひととき目立っていた。三重県の中学校教育の一端を、本県中学校長会として広く全国に発信できたことは非常に喜ばしいことであると思う。大役を引き受けてくださった二校の校長先生には改めて謝意を伝えたい。

開会行事の後、続いて、文部科学審議官 前川喜平氏より文部科学省説明が行われた。詳細な説明資料をベースに教育課程の方向性、土曜授業の教育活動の推進、教職員指導体制の整備等最新の話があり、国あるいは文部科学省の今後の教育に対する考え方を生の声で聞くことができ、個人的には、大会を通じて最も興味を惹かれた話となった。

前出の第二研究協議題は、久居西中学校 西村校長の「学校生活に適応し豊かな学校生活を築く指導の充実」で具体的には精神科医

と連携した学校メンタルヘルス活動の取組についての実践報告があり、問題行動の発生件数と不登校生徒数の減少に繋がったとの成果が報告された。

今回の大会は、翌日の講演も含めて私にとつて、非常に学ぶべきことが多くあり、この機会に恵まれたことに感謝したい。

と連携した学校メンタルヘルス活動の取組についての実践報告があり、問題行動の発生件数と不登校生徒数の減少に繋がったとの成果が報告された。



全日中北海道（苫小牧）大会
第二分科会に参加して

南伊勢町立南勢中学校
校長 奥井 準次



第二分科会は九州地区が提案を担当し、『確かな学力の定着を図

る指導と評価」という研究題で話し合いが進められた。

最初の提案は宮崎県日南市立北郷小中学校の森下校長から、「学ぶ意欲を高める授業改善の在り方」と家庭学習と連携した学習環境づくり」という視点で報告がされた。

基礎学力の定着に課題がある生徒の実態を改善していくために、まず、「わかった」「できた」を実感できる授業を創造していくことに着手し、市全体で『日南モデル』を作成し、問題解決的な授業展開、教えて考えさせる授業づくりを市内全域で進めていること、更に授業をチェックシートを使って校長が評価し、それを「教職員評価制度」と連動させて一人ひとりの教員に指導助言していること、また、家庭学習の充実のために小一から中三までを対象に「家庭学習の手引き」を製本し配布することで、その充実を図っていることが報告された。

次に福岡県広川町立広川中学校 富山校長が、「志を持ち、確かな学力を身に付け、たくましく生きる子供を育てる小・中連携の取組」と題して発表を行った。

一中三小の広川町では「九力年指導計画部会」を組織し、キャリア教育を中心に据えて「自分の生き方について考え、自立できる子供を育てる」ことを目標に取組を

進めていることが報告された。

家庭との連携についてはここでも家庭学習ノートを使って連携を図っているとのことであった。

助言者からは全日中教育ビジョンの提言に沿った実践であり、校長がリーダーシップを発揮して研究の方向性を明確にし、組織的かつ体系的に取組が進められていることで成果が確かなものになっている、という指摘があった。

校長は、生徒の実態を的確に把握し、小学校や家庭・地域を巻き込み、一体となった取組を構築していくことが必要であると感した。また、気候も穏やかで北海道校長会の方々に大変親切にいただいたおかげで、有意義で楽しい研修をさせていただいた。



特別寄稿

三重県市町教育長会会長
名張市教育委員会教育長

上 島 和 久



三重県小中校長会会員の皆様には、各学校において校長としてリーダーシップを発揮され、子どもたちの学びや育ちの充実・発展のため日々ご尽力賜っておりますことに心から感謝申し上げます。

また、昨今の様々な課題解決に向け、ご理解・ご協力いただいておりますこと、大変心強く感じているところです。

さて、社会環境が変化する中、教育に係る課題も多様化・複雑化し、その解決に向けた提言が中央教育審議会や有識者会議等から頻繁になされています。

例えば、七月には、教育再生実行会議が小中一貫教育学校制度創

設などを柱とした提言を閣議報告し、以降、中央教育審議会における議論が活発化しています。

九月には、社会の急速なグローバル化の進展の中で、英語力の一層の充実が我が国にとって極めて重要な問題として、アジアの中でトップクラスの英語力を目指した「今後の英語教育の改善・充実方策について報告」グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言」が「英語教育の在り方に関する有識者会議」から出されました。

また、十月には、道徳の時間において、その特質を生かした授業が行われていない場合があるとして、道徳の時間を「特別の教科道徳（仮称）」として位置付ける「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」が中央教育審議会において取りまとめられています。

学校や教育委員会は、このような動向を注視しつつ、先をしっかりと見据え、三重の子どもたちが夢や希望を持っていきたいと生きて

いく力を育むため、真に必要な取組を進めていく必要があります。

ややもすると、子どもたちにとって確かな学力の向上のための取組が、学力・学習状況調査の点数アップ中心の取組となり、子どもと向き合う時間の創造どころか支援という名のもとで学校現場へのし寄せになって、教職員の疲弊感を増幅させてしまっているのではないかと若干の危惧をしています。

『最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるでもない。唯一生き残るのは、変化できる者である』とイギリスの自然科学者チャールズ・ダーウィンは言っていますが、学校が子どもの可能性を引き出し、これまで以上に豊かな取組を進めていくため、何を変化させ、何を不変として守らなければいけないのか。学校のあるべき姿や教育委員会の果たす役割等について、今一度立ち止まって、冷静に考え直す必要があるのではないのでしょうか。

最後になりましたが、本会の益々のご発展と皆様の一層のお元氣にてのご活躍を祈念いたします。

ちよつと
いい話鈴鹿山
稲刈る子らを見守りて菰野町立千種小学校
校長 山田 敦子

抜けるような秋空が広がり、故郷の山々がその稜線をくっきりと現した日の午後、五年生児童と一緒に稲刈りに出かけた。五月に地域の「水土里の郷の会」のみなさんにお世話になって田植えを行った田んぼである。子どもたちが到着すると、もうすでに雨で倒れてしまった周囲の稲がコンバインで刈り取られ、手で刈りよい部分を残していたのであった。

子どもたちは、説明を受けるやいなや、ザックザックと大胆に稲を刈り始めた。さすが田舎の子である。手元から軽快なリズムが流れてきた。

子どもに混じって稲を刈り始めた私の脳裏に、懐かしい情景が浮

かんできた。子どもの頃に、稲刈りを手伝わされた時の情景である。コンバインなどなかった当時、固定された脱穀機まで稲を担いでいく作業。ハシカが汗ばんだ身体にくっついて痒いし、子どもにはけっこうな重労働である。内心いやでいやで仕方がなかった。線路わきの田んぼで、黙々と稲を運んだ。翌日学校で集雲があったのだろう。校長先生がこんな話をされた。「電車に乗って外を見ていたら、小学生らしい子どもが一生懸命に稲を運ぶ手伝いをしていました。大変感心しました。」

ぼうつと話を聞いていた私であつたが、「それ、わたしだ！」と思わず心の中で叫んだ。観てくれた人がいたんだ。それも校長先生が……。家に帰るまで誰にも伝えることはなかったけど、心がほんのり温かくなったのを覚えている。正直、報われた気がした。すでに半世紀も前の一コマである。

今の子どもたちは楽しんで稲刈りをしている。刈り取った稲を担いでコンバインまで運ぶ作業も楽しそうだ。そんな子どもたちを地域の方々とともに鈴鹿の山々が、温かく見守ってくれていた。

半世紀前のあの日も、おそらく鈴鹿の山々は今と同じように私を見守ってくれていたのだろう。わ

ずかな時間であったにせよ、確実に私を見守ってくださっていた校長先生とともに。

『石の上にも三年』

伊賀市立崇広中学校

校長 森嶋 久伸



これは、Fさんという方のお話で、Fさんは頸椎の病気を患って、両手、両足がうまく動かず、一人で歩くことができないので車いすでの生活をしてられます。そんなFさんがとても気に入っている言葉が、この「石の上にも三年」という言葉だそうです。「石の上にも三年」という言葉は誰でも聞いたことがあると思いますが、どんなに苦しくても大変でも、じつと辛抱すれば必ず報われる、我慢すること、忍耐することが大切というような意味で使われますが、車いすに座って旦那さんの帰りを待つFさんにぴったりの言葉のように思います。

しかし、この言葉には続きがあつて、その続きはFさんの友達が考えたそうです。実はFさんは

その続きの方が好きだといっています。どんな言葉かというと、「石の上にも三年。三年も我慢したのは石の方。」という言葉で、その話を聞いて、確かにその通りだなと思いました。上に座っている人より座られている方が大変です。

Fさんはこう言っています。「つらい思いをしているのは自分だけじゃない。私はまわりの人にいっぱい支えられている。」Fさんは、自分を支えてくれる旦那さんや、お手伝いしてくれる介護の方々、連絡をくれる友人、自分が使っている車いすなど、多くのものに感謝しているそうです。以前は、動けなくなつた足をうらんでよくたたいたりしていたそうですが、今では、その足をたたいたりすることなく、不自由な足にすら感謝するようになつたとのこと。

早いもので、私は今年で定年を迎えます。「石の上ではないですが、三十八年間」、今振り返ってみると意外と短かった気もしますが、いろんなことがあつたように思います。この三十八年間、苦勞したことも多いですが、苦勞したのは自分一人ではなく職場の先生方や保護者・地域の皆様方いろいろなお世話になり、そして、子どもたちに支えられ、パワーをもらつて今日までやってこられたと改めて感謝しています。



会長あいさつ

三重県小中学校長会

第4回代表者会

9月11日



委員長・副委員長からの提案



小学校部会



中学校部会

午後の各部会の様子

地区校長会だより

志摩市小学校長会

現在志摩市には十七校の小学校と七校の中学校があります。少子高齢化社会の荒波にはあらがえず、平成二十一年度には二十一校あった小学校が、今では十七校に、そして平成三十年度には半数ほどに減少してしまっています。

学校数が減少することは、校長の数も少なくなるということです。校長会組織や活動について見直しをはかることが急務になっています。懸案の一つに小中学校長会の一本化がありました。平成二十五年度からは小学校長会と中学校長会が一つになって合同の会議を持つことになり、新鮮な気分で和気藹々と活動を展開しています。

また、メンバーは市学力向上委員会、市人権教育研究会、鳥羽志摩教育研究会、市小学校体育研究会、鳥羽志摩特別支援教育研究会など二十あまりの教育関係組織の責任者を兼務することになります。そうになると一人が何役も担当しなければなりません。学校数の減少はこんなところにも影を落としています。

月一回の定例会では、市教委から所管事項の伝達、それぞれの担当からの連絡などがなされます。また、学校で困ったことなどについても情報交換する場となっています。

今後さらに、学校が抱える課題を出し合ったり、学校のリーダーとしての悩みを話し合ったりして、会員一人一人が『元気になれる校長会』にしていきたいと考えています。

紙幅が残されています。そこで志摩市の番宣を「志摩市のHPを見ていただく」と「御食つ国志摩」という言葉が掲載してあります。



「御食つ国」とは「古くから朝廷や神宮に海産物などを貢進することのできた国」とあります。豊富な食材、育んできた自然、現在に受け継がれる伝統や祭事。そんな魅力いっぱいの志摩へどうぞお越しください。

熊野市・南牟婁郡中学校長会

「生徒たちの夢を紡ぐ校長会」

伊勢路からの九十九折の古道をいくつか登り下りし、熊野松本峠に至れば、眼前に広がる紺碧の海原。そして二十キロに及ぶ七里御浜。遮るもののない水平線は地球が丸いことを実感させてくれる。浜辺に立つと、平安の時代より貴賤を問わず何人をも受け入れてきた熊野の懐に抱かれる。

紀南中学校長会は、熊野市・御浜町・紀宝町の十二中学校長で組織している。生徒数が百人に満たない小規模校が多く、小中併設校も三校ある。少子過疎高齢化の典型的な地域であるが、それだけに地域と学校のつながりが強く、学校への期待も大きい。

各校長は、校長会各役員の他、教育課題・中体連・研修・進路・生徒指導・へき複教育などの要職を受け持っている。そして、月毎に三市町を巡り、各担当からの報告・提案、当面する教育課題や生

徒指導等についての協議、情報交換を行い、連携を深めている。また、熊野市小学校長会、南牟婁郡小学校長会とも連携している。

紀南の喫緊の課題は、一つには南海トラフに源を発する東海・東南海・南海の地震・津波に対する防災対策および生徒たちの防災力の育成、もう一つは生徒たちの進路を保障する学力の向上である。

いずれも将来の当地域、日本を担っていく生徒たちにつけるべき必要な力と考えている。

紀南中学校長会には地元出身の校長はもとより、津市や名張市など他市町からの赴任者もあり、共に紀南の中学生が夢・希望・目標をもつて成長していけるよう、各校で特色ある教育課程を組み尽力している。

みな当地の生徒たちの夢を紡ぐために奮闘する毎日である。



原稿募集

会員の皆様の投稿をお待ちしています。なお、内容・字数等につきましては事務局へお問い合わせ下さい。

●「校長会みえ」について、ご意見・ご要望があればお聞かせ下さい。

三重県小中学校長会
広報委員会

編集後記

三重県小中学校長会広報「みえ」の第三八号を発行するにあたり、執筆を依頼させていただいた先生方には公務が多忙の中、すばらしい原稿を執筆していただき、誠にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

秋から冬にかけては、成長に關わってきた子ども達の姿が成果として表れる時期です。文化祭や学校によつては研究発表等、大きな行事を通してそれを発信することができたのではないのでしょうか。

今号では、今日の課題の克服に向けてと題して各校長会から報告していただきました。また、全連小埼玉大会や全日中北海道大会に参加された方からも報告をいただき重要な情報を提供していただきました。

紙面には表すことができませんが、県内各校長会におきましても諸課題の解決に役立つ研修活動が盛んに行われていくことで、先日も私が参加した研修会で「危機管理と保護者対応」「若い教師を育てるために」の内容の講演を聴き、改めて自身に課せられている責任の重さを感じました。

今後ともご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。